

盲腸歇兒尼亞實驗例追加

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38686

十全會雜誌

(第貳拾參號)

原 著

○盲腸歇兒尼亞實驗例追加

(右外鼠蹊盲腸歇兒尼亞)

醫學得業士

東

良

平

(澤金)

本例ハ本年一月講話會ニ述ベタルモノニシテ今之ニ一ニ訂正ヲ加ヘタルモノナリ

諸君!!何レノ歇兒尼亞ヲ論ゼズ其内容中盲腸ノ甚ダ少數ナルコトハ晚近統計家ノ調査ニヨリテ既ニ證明サル、所ナリ即チ Mayle ハ四百四十三例中十一例ヲ見 Tullier ハ全「リテラツール」ヨリ漸ク五十四例ヲ算ヘ後 Hildebrand ハ百三十一例ヲ集メタルノミ

一昨年十一月我金澤病院外科クリニツクニ於テ本症ノ一例シカモ左外鼠蹊不還納性盲腸歇兒尼亞ヲ三歳ノ小兒ニ實驗シ余ハ昨年四月第三回日本外科學會ニ報告シ北川君亦十全會講話會ニ演舌シ之ニ關スル精シキ報告ヲハ全年七月全會誌十九號ニ載セタリ殊ニ其發生上大ニ興味アルモノナルコトハ氏ノ諸「リテラツール」ヲ參照シテ述ベタル詳ハシキ記載ニヨリテ諸君ノ既

ニ知ラルル所ナリ

然ルニ余ハ亦計ラズモ此一週間前箝頓症狀ヲ以テ來リタル右鼠蹊歇兒尼亞ニ於テ盲腸其内容ヲナセルヲ見タリ元來右側盲腸歇兒尼亞ハ左側ノモノヨリ多數ナルコトハ既ニ其位置ニヨリ明了ナル所ニシテ *Furber* 等ノ調査モ亦五ト一ノ比例ヲ呈ハセリ故ニ左側盲腸歇兒尼亞ヨリハ興味少シト雖モシカモ稀有ナル盲腸歇兒尼亞例追加トシ且ツ盲腸歇兒尼亞中多少格外ノ點アルノミナラズ此歇兒尼亞ハ一般歇兒尼亞例中、年齢ノ破格ヲ有スルヲ以テ亦タ興味ナシトセズ之レ余ノ聊カ本誌ノ餘白ヲ汚サントスル所以ナリ

本患者ハ明治三十五年一月十七日本院ニ入院セラレモノニシテ左ノ如シ

金澤市野田寺町菓子商族 淺〇彦〇 年齢六十二歳

今此患者ノ病歴ヲ略述スルニ血族ニ於テ著明ノ結核遺傳ヲ有スルモ患者ハ生來强健ニシテ未ダ醫療ヲ受ケタルコトナシ只爰ニ特筆スベキハ壯年ノ時淋疾ヲ感染シ四年前即チ本症タル歇兒尼亞ノ顯ハル、一年前ニ至リ高度ノ尿道狹窄ニ陥リ尿線細小ニシテ一回ノ排尿ニハ約二十分時モ便所ニ立ツヲ常トシタリ又本患者ハ從來即チ幼時ニ於テモ嘗テ歇兒尼亞ヲ有セザリシニ二三年前自然ニ陰莖根ヲ距ルコト右方約三指横徑ノ所ニ於テ「*プーボ*」ノ如ク膨隆シ漸ク鶏卵大トナリシモ別ニ障害ナク且壓迫ニ由リ消失シタルヲ以テ意ニ介セザリシニ年ヲ逐フテ増大シ且内下方ニ進ミ遂ニ陰囊内ニ達シ且昨年一回五時間ニ亘ル箝頓症狀ヲ發シ漸ク按摩ニ由リ還納シ得タリ爾來還納性ナリシモノ一昨日即チ今日ヨリ十日前突然陰囊ノ緊滿ト牽引痛ヲ伴ヒ如何ニ

自家按摩法等ヲ試ムルモ還納セザルヲ以テ一月十七日入院シタリ依テ先ツ麻醉ナク種々ノ還納術ヲ試ミタルモ無効ナルノミナラズ絶ヘズ疼痛ト緊張ヲ増シ嘔氣嘔吐ヲ呈ハセリ余ハ數時間後之ヲ診スルニ脉搏猶ホ不良ナラズノ嘔氣嘔吐ナシト雖モ患者ノ訴ニ據レバ三日前ヨリ尿ヲ通セズ所謂 Anuria ニ陥レリ胸部ニハ輕キ肺氣腫及氣管枝炎ヲ証明シタリ局所ノ症狀ハ右鼠蹊部ヨリ右陰囊内ニ互ル腫大ニシテ即チ其方向ハ著シク斜ナリ陰囊皮膚ニ變化ナシ、睪丸ハ其後下方ニ位ス腫物ハ鼓音ヲ呈シ觸ル、トキハ腹内ニ互ル牽引痛ヲ訴フ腹部ハ緊滿又ハ凹陷セズ

如斯キ症狀ヲ呈スルヲ以テ本病ノ診斷ハ年齡ニ據テ考フルトキハ確カニ内鼠蹊腸歇兒尼亞トスベキハ至當ナレドモ其囊頸ハ全鼠蹊管ノ方向ヲ取りテ外見外鼠蹊歇兒尼亞ノ狀ヲ呈シ且ツ手術ノ際後ニ記スルガ如キ所見アルヲ以テ本症ハ老年ニ至リ特發セルニ拘ラス外鼠蹊歇兒尼亞ト診斷セザル可カラズ兎ニ角多少「イレウス」症狀ヲ呈セルヲ以テ直ニ先ツ歇兒尼亞手術ヲ行フニ決シタリ

式ニ從ヒ斜切開ヲ爲シ陰囊ニ於テ歇兒尼亞囊ヲ露出スルニ囊ハ單一ニシテ腸ノ歇兒尼亞ハ且ツ尋常ノ如ク全ク内容ヲ被包シテ彼ノ成書ニ盲腸歇兒尼亞ノ囊ニ記スルガ如ク囊形成ニ關與スルヲ見ズ囊底ノ一部蒼白色ニ混濁シ僅カニ肥厚スルノ外異常ヲ認メズシテ内容タル腸管ヲ透見ス次ニ歇兒尼亞囊ヲ頸部ニ至ル迄テ精系ヨリ剝離シ先ツ小切開ニヨリ内容ヲ漏ラスニ僅カニ溷濁シタル帶黃色ノ液ヲ流出スルノミ此ノ切開ヲ開大シ内面ヲ檢スルニ滑澤ニシテ癒着

等ノ變狀ヲ見ズ内容ハ獨リ稍ヤ僅カニ鬱血セル腸ノミニシテ他器ヲ見ズ此腸ハ普通腸歇兒尼亞ニ於ケルガ如キ蹄係ヲ見サズシテ盲囊狀ヲ呈ス初メ過大ノ腸壁歇兒尼亞ナランカヲ疑ヒシモ善ク檢スルトキハ比較的輕シ此ノ盲囊狀ナル腸ノ下端ニ於テ虫様垂ヲ發見シ且ツ盲囊狀腸壁ニハ結締織束ヲ認メタルヲ以テ即チ盲腸ナルコト明カト爲レリ然ルニ此ノ盲腸ハ殆ンド七十度計リニ自軸廻轉スルヲ見タリ依テ之ヲ解キ更ニ囊頸近部ヲ檢スルニ尙ホ小腸終部及ビ上行結腸ノ一部ノ存在スルヲ見タリ又タ門部ニ於テ囊頸ハ僅少ノ結締織輪ニヨリ絞約セラル、ヲ見タリ之ヲ切り腸ヲ檢スルニ腸管ニハ壞疽ノ兆ヲ認メズ此ノ所見ニヨレバ前述イレウス症狀ノ有リシニ適セズト思考シタレバ更ニ第二ノ箝頓ヲ慮リ先ヅ徐ロニ囊頸内ニ指ヲ送入スルニ指ハ直歇兒尼亞ニ於ケル如ク直ニ腹内ニ進マズシテ斜ニ鼠蹊管内ニ向ヒタリ次ニ歇兒尼亞門及囊頸ヲ開キ徐々ニ盲腸ヲ引クモ從ハズ小腸ハ容易ニ脱出シ之レヲ檢スルニ變狀ヲ認メズ盲腸及ビ結腸上行部ノ下部ハ腸間膜ヲ有セルヲ認メタリ又此ノ歇兒尼亞ノ内側ニ於テ下腹壁動脈ヲ觸知シタリ之ヲ以テ本症ハ老人ニ於ケル外鼠蹊歇兒尼亞ナルヲ確定シタリ爰ニ於テ虫狀突起ハ式ニ從ヒ抽出術ヲ施シ腸ヲ還納シ歇兒尼亞門部ハ *Passini* 氏ニ從ヒ手術ヲ終レリ術後ハ脉性充分佳良ナラザリシヲ以テ虚脱ノ豫防トシテ食鹽水ノ注入ヲ施シ確實ナル脉膊ヲ得テ醒覺後暖キ室ニ移シ更ニ興奮劑ヲ與ヘタリ

此ノ患者ハ翌日午前中ハ猶確實ナル脉膊ヲ有シ体温尋常精神平時ニ異ナラズ然ルニ午後ヨリ漸々熱發シ咳嗽強ク咯痰多ク全胸強キ加答兒性肺炎ノ症狀ヲ呈シ其翌日即チ手術後第三日ヲ

以テ死亡シタリ

各學者ノ調査ニ據レハ大腸等ノ腹膜ヲ被ムル度合ニ於テハ多少ノ差異アルモ盲腸ノ全ク之レヲ以テ被ハレ居ルハ一定ノ論ナリ而シテ盲腸歇兒尼亞ノ多數ハ全然タル歇兒尼亞囊ヲ有スルモノタルコト亦一定セル所論ト云フヲ得ベシ然レモ從來盲腸歇兒尼亞ハ完全又ハ不完全ナル囊ヲ有スルヤ否ヤニ就テハ學者各々見解ヲ異ニセルコトアルハ吾人ノ知ル所ニシテ之レ他ナシ唯ダ盲腸ト名クル部分ノ區劃ヲ定ムルニ當リ人々其認ムル處廣狹ノ差異アルニ據ルナリ今之レヲ例セハ Koenig ハ廻盲瓣ヨリ下方即チ盲囊狀部ノミヲ盲腸ト名クルトキハ其歇兒尼亞ハ每常完全ナル歇兒尼亞囊ヲ有シ盲腸ハ囊内ニ浮遊シ自由ナル運動ヲ有シ得ベシト雖モ若シ盲腸ノ區域ヲ廣メ腹膜ヨリ完全ニ被ハレザル部分即チ腹壁ニ附着セル廻盲瓣以上迄モ盲腸ニ加フルキハ此歇兒尼亞ハ常ニ不動性ニシテ歇兒尼亞囊ハ後壁ノ一部ヲ闕如スト云ヘリ Linhart, Bardeleben 等亦タ之レト同様ノ旨意ヲ記セリ之レニ反シ Albert, Tillmanns, Bergmann, Bruns, Mikulicz 等ハ廣ク廻盲瓣上方迄ヲ盲腸ト認ムルモノノ如ク盲腸歇兒尼亞ニ於テハ每常完全ナル囊ヲ有セズ盲腸ノ腹内ニ存スル儘即チ歇爾尼亞床ト共ニ移動的ニ下降シ盲腸ハ每常囊ノ一部形成ニ與リ不還納性ナリトシ其狀況ヲ舉丸下降ニ對スル莢膜ノ關係ニ比喩シタリ

本例ハ盲腸歇兒尼亞ノ一ニノ囊頸内ニハ廻盲瓣及ビ結腸上行ノ一部ヲ(盲腸ノ區域ヲ狭キ意味ニ取ルトキハ)含有セリ而シテ歇爾尼亞囊完全ニシテ各内容ハ其内ニ於テ自由ナル運動ヲ有セリ故ニ前ニ述ビタル König, Albert 等其他成書ニ記セルモノト大ニ其趣キヲ異ニシ一ツノ異例

ト見做サザル可カラズ即チ本例ハ廣意味ノ盲腸歇兒尼亞ナルニ拘ラズ完全ナル歇兒亞囊ヲ具
 有セルモノナリ而シテ此廣意味ノ不動性盲腸歇兒尼亞ハ Einhart, Tillmanns, Albert 其他諸家ノ述
 ブル所ニヨレバ歇兒尼亞床ノ漸ク移動下垂セルニ由ルモノナルモ本例ニ於テハ狹意味ノ盲腸
 ハ勿論上行結腸ノ一部モ亦腸間膜ヲ有シ歇兒尼亞内ニ於テ可動性ナリシヲ以テ腹膜ノ状態モ
 亦タ多少常態ヨリモ異例アリシモノトス而シテ此ノ結腸上行部ノ格外ナル腸間膜ハ後天性ニ
 Grasel 等ノ唱フル如ク盲腸固定漸ク弛緩シ遂ニ腸間膜ヲ形成シタルモノナルカ又ハ Gruber ノ
 例ニ於ケルガ如ク先天的ニ盲腸間膜ヲ有セルモノナルカハ知ルニ由ナシト雖モ兎モ角彼ノ既
 往症ニ述ベタル尿道狹窄ニ基ク努力主因ト爲リ遂ニ這般ノ歇兒尼亞ヲ形成スルニ至リタルモ
 ノナル可シ

終リニ本例ニ於テ一般歇爾尼亞中破格トスベキコトハ先天的又ハ幼時外鼠蹊歇爾尼亞ヲ有セ
 ザリシニ後年高老ニ及ビ外鼠蹊歇兒尼亞トシテ呈ハレタル点トス Malgaigne ニヨレハ高年ニ至
 リ特發スル歇兒尼亞ハ内鼠蹊歇兒尼亞ニシテ外鼠蹊歇兒尼亞ニ非ザルコトハ殆ンド動カスベ
 カラザル定率タルコトヲ示シ諸多ノ學者異口同音之ヲ贊成スルニ拘ラズ本例ハ手術中發見セ
 ル所見即チ下腹壁動脈ノ歇兒尼亞頸ヨリ内方ニ在リシ所ニ據リ實ニ一ツノ格外ト云ハザルベ
 カラズ然レ余ハ唯ダ患者ノ幼時鼠蹊歇兒尼亞ナカリシト云ヒシハ果シテ其存否ヲ知ラザリシ
 ニハ非ズヤ或ハ幼時既ニ鼠蹊管内口ニ小ナル歇兒尼亞存在シタルモ障害ナキヲ以テ發見セズ
 高年ニ及ビ新原因ノ襲來ニヨリ増大セシニ非ズヤトノ疑ヲ存スルニ止マルノミ

此記載ヲ終ルニ當リ恩師木村博士ノ許可ヲ與ヘラレタルコトヲ謝ス

引用書目

1. Dr. Hildebrand, Die Lagerverhältnisse des Cöcum und ihre Beziehung zur Entstehung von äusseren Coec-
albrüchen, Deutsche Zeitschrift für Chirurgie, Bd. 33, S. 182.
2. Prof. Dr. F. König, Lehrbuch der Speciellen Chirurgie, Bd. II, 1889, S. 291.
3. Prof. Dr. E. Albert, Lehrbuch der Chirurgie und Operationslehre, Bd. III, 1885, S. 141.
4. Prof. Dr. A. Bardeleben, Lehrbuch der Chirurgie und Operationslehre Bd. III 1881. S. 732.
5. Dr. W. Linhart, Vorlesungen ueber Unterleibs-Hernien, 1882.
6. Prof. Dr. E. von Bergmann, Prof. Dr. P. von Bryuns, Prof. Dr. J. von Mikulicz; Handbuch der praktischen
Chirurgie Bd. III Th. I. S. 604, 604, 606, 607, 617.
7. Prof. Dr. H. Tillmanns, Lehrbuch der Speciellen Chirurgie II. Theile, S. 181. 1901.
8. 北川健三,盲腸ニ因スル左側外鼠蹊兒尼亞ノ一例,十全會雜誌第十九號
9. 二三ノ外科的實驗ニ就テ,第三回日本外科學會誌